

平成 29 年度 研究成果報告書
Research Achievement Report FY2017

講座名・職名 Course Title・Job Title	日本語日本文化教育センター・准教授
氏名 Name	松村 薫子
専門分野 Academic Field	日本文化学・民俗学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	<p>①袈裟や素材にまつわる怪異伝承研究</p> <p>②絵本や漫画にみられる妖怪の表象についての研究</p>
<p>①「袈裟」と「素材」にまつわる怪異伝承研究では、仏教僧侶の法衣や袈裟が雨乞いの時に雨を降らせる靈験をおこしたり、狐や猫、狸といった妖怪が人間に化けるときに袈裟・法衣を身に着けたりする伝承が多くみられる。また、龍がお礼に袈裟を置いていったという伝承もみられる。それらの伝承は仏教經典において、袈裟が不思議な力があると説く「袈裟功德」の考え方に影響を受けているのではないかと考えられる。また、素材については、麻に関する事例が極めて多い。麻は幽霊や妖怪を遠ざける効果があるという伝承がみられるが、その理由については今後も引き続き研究を行いたい。</p> <p>②絵本や漫画にみられる妖怪の表象についての研究では、1920年から2016年までに刊行された約130点の妖怪絵本を分析し、妖怪絵本を製作する作者や画家がどのようなメッセージを妖怪に託して描いているのか、また、幼少期の妖怪イメージ形成への影響について考察した。妖怪の絵本の初期のものとしては江戸時代中期ごろの草双紙や大正時代の『赤い鳥』や『コドモノクニ』が挙げられる。それらの本で描かれる妖怪の多くは怖い存在であることを表現しているが、中には危害を加えない妖怪もいることが描かれる。その後の昭和時代における妖怪絵本では、伝承に基づいた妖怪の特性が描かれる一方で、新しい妖怪の姿も描かれるようになった。さらに平成時代に入ると、妖怪の種類が豊富になるとともに妖怪が人間と同じ心を持ち、同じ生活をする存在として描かれ、怖い存在から人間の身近にいる親しい存在へと変化している。さらに、子供の生活環境の変化や自然環境破壊に警鐘を鳴らすことをメッセージとして込める絵本が多くなり、作者たちの様々な思いが妖怪に託されているといえる。妖怪絵本の展開は、近代化という大きな時代の変化のなかで人間の生活が変わっていったことと連動している。「近代化して変わっていった人間の生活」と「昔から変わらない妖怪」という対立構造で描き、妖怪を時代の変化をはかるものさしとして用いている作品も多い。</p> <p>本研究は、「絵本における表象と影響—現代における妖怪イメージの形成を中心に—」というタイトルですでに出版社へ入稿しており、次年度に共著本として刊行される予定である。</p>	